

## 総 説

# キリシタンの子どもたちの音楽教育

金谷 めぐみ\* 植田 浩司\*\*

### 〈要 旨〉

16世紀末、西洋人たちが日本に来航し、西洋文明を伝えた。1549年、イエズス会宣教師ザビエルは、キリスト教布教を開始し、キリスト教の礼拝に不可欠の音楽が宣教師たちにより日本の子どもたちに伝えられた。九州の各地と安土に神学校（セミナリオ）が設置され、キリシタンの子どもたちは、ヨーロッパのセミナリオと同等の教育を受け、ラテン語で歌い、西洋の楽器を奏でた。その教育の質と効果は天正遣欧少年使節（「少年使節」と略）が物語っている。4人の選ばれた少年は、「少年使節」として1582年に長崎を出帆し、1584年ポルトガルに到着、スペイン、イタリアの各地を歴訪し、祝福と歓迎を受けた。彼らがローマを訪問した時は、カトリック教会で聖歌隊の高音部を歌うスペイン人歌手（カストラートと云われている）が出現し始めた時代であった。「少年使節」の一人が西洋と日本の音楽を比較して語った貴重な談話の記録が残されている。この記録と時代背景から「少年使節」とカストラートとの接点についても考察する。

キーワード：子ども、キリシタン、教育、西洋音楽、天正遣欧少年使節

### 緒 言

16世紀末のキリスト教の伝来により、日本における子どもたちに西洋音楽の教育が行われた。1549年、ポルトガル船に乗って来航したイエズス会宣教師ザビエルは、鹿児島、山口、豊後でキリスト教布教を開始した。その後、1579年来日した宣教師ヴァリニャーノは、子どもの教育機関を日本に設置した。そこでキリスト教会に奉仕するキリシタンの子どもたちは神学を学び、キリスト教音楽すなわち、西洋音楽を修得した。彼らは、宣教師たちの教育によりラテン語の聖歌を歌い、ヨーロッパから伝来したばかりの楽器を演奏した。彼らの中の選ばれた4人の少年たちが天正遣欧少年使節としてヨーロッパに派遣されたことは、世界の歴史の中でもよく知られている。天正遣欧少年使節はポルトガル、スペイン、イタリア各地の主要な教会を歴訪し、当時最盛期であったローマ・カトリック教会の多声聖歌を聴き、使節の少年たちも演奏を披露した。そして8年半に及ぶ旅の後、帰国した彼らは日本の神学校で子どもたちに西洋音楽を教えた<sup>1-6</sup>。

本総説においては、16世紀中頃-17世紀初頭の日本に、宣教師たちにより設立された神学校でキリシタンの子どもたちが受けたキリスト教教育、とくに音楽教育について記述し、日本で音楽教育を受け、ヨーロッパを見聞した天正遣欧少年使節が接し、感じ、そして語った西洋音楽およびカストラートとの接点について考察する。

## 1. イエズス会宣教師の来日とキリスト教音楽

### 1) 日本人の西洋音楽との出会い

西洋音楽すなわちキリスト教音楽は、16世紀中頃日本に伝えられた<sup>1-4</sup>。この16世紀、ヨーロッパ諸国は大航海時代を迎え、アジアへ進出し、キリスト教布教活動とともに植民地および貿易事業の開拓を競っていた<sup>3</sup>。

1543年、中国大船（倭寇）に乗っていたポルトガルの商人たちが種子島に漂着した。そこで日本人は初めてヨーロッパ人と接触し、その後貿易が開始され、

\* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科

\*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科

様々な西洋文明の流入が始まった。その西洋文明のなかに、日本に大きな影響をもたらしたキリスト教という宗教があった。当時、日本には神社仏閣が存在し、神道による民族信仰や、中国、朝鮮から伝わった仏教信仰、さらに儒教などが信仰されていたが<sup>27</sup>、西洋から伝来したキリスト教はたちまち九州を中心に広がった。ローマ・カトリック教会の信仰に、すなわち教会の礼拝に不可欠の教会音楽は、当時の人々に大きな感銘を与えた<sup>4</sup>。

1534年、カトリック教会内の司祭修道会の一つとして創設されたイエズス会は、ポルトガル人たちが発見した新しい地へ赴き、世界規模の布教活動を展開していった。イエズス会創始者の一人フランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier, 1506-1552) は、インド総督使節としてインド管区内 (東南アジア、中国、日本を含む) を中心に布教活動を始めていた。そして1547年、マラッカ (マレーシア) で布教活動中に初めて鹿児島から来た日本人と出会った。その日本人はアンジロ (ヤジロウとも呼ばれる) であり、自分の犯した罪を贖うためマラッカまで来て、ザビエルに会い、洗礼を受けた。これが契機で1549年、ザビエルは鹿児島の港に到着した<sup>23</sup>。

鹿児島・薩摩の領主であった島津貴久 (1514-1571) は、ポルトガルとの貿易を望んでいたので、ザビエル一行を歓迎し、鹿児島におけるキリスト教布教活動を許可した。その後、ザビエルは周防 (山口) の大内義隆 (1507-1551) の協力を得て、1551年、山口に教会を建て、翌年1552年12月、降誕祭の日に、歌を伴ったミサを執り行った。ミサで宣教師たちは日本人信徒の前で聖歌を歌い、これは「我等はミサを歌ひ良き声にはあらざりしがキリシタン等は之を聞きて大いに喜びたり」と記録されている<sup>8</sup>。山口教会設立の年、ザビエルは大内義隆に楽器を贈ったが、これまでの研究で、この楽器はクラヴオ (鍵盤楽器・クラヴィコード) であったと考えられている。この時の歌や楽器の記録は、日本における最初の洋楽演奏の記録であり、日本人がキリスト教を通して初めて西洋音楽と出会ったのは、ここ山口においてであった<sup>149</sup>。

## 2) 日本における最初の西洋音楽演奏と発展

イエズス会宣教師ザビエルらによって山口においてミサが行われて間もなく、大分の豊後府内、長崎、島原、熊本にもヨーロッパから多くのイエズス会宣教師が派遣されてきた。彼らは「南蛮人」と呼ばれ、キリスト教とともに西洋の知見、珍重品そして西洋音楽を

日本に伝えた<sup>24</sup>。

山口で布教を行っていたザビエルは、豊後府内の大友宗麟 (1530-1587) に招かれ、そこで1551年に布教が許可された。豊後府内は宣教師と宗麟らの熱心な信仰により入信者が多く、1555年には府内の教会で日本の子どもたちにより聖歌が歌われ、1557年に、聖歌隊は二部に分かれて聖歌を歌った記録が残っている<sup>10</sup>。さらに1561年には読み書きのほか音楽が教えられ、子どもたちは1562年、宗麟を招いて西洋音楽を披露した。白衣を着た子どもたちのヴィオラ・ダ・アルコ (ヴィオラ) の演奏は「基督教国の王侯の前にも奏し得べきものなりき」と称賛され、ヨーロッパの王侯の前で披露しても恥ずかしくないほどの腕前であったことが記録されている<sup>11</sup>。

現在、大分市には、日本人が西洋音楽を演奏した「西洋音楽発祥」の地として、宣教師がヴィオラを弾き、日本の子どもたちが歌を歌っている記念碑が建てられている。また、1552年以降、多くのポルトガル人宣教師が豊後を訪れ、教会やそれに付属する図書館、学校さらに病院を建てた。この病院は1555年、イエズス会宣教師で医師でもあったルイス・アルメイダ (Luis Almeida, 1525?-1583) が府内に育児院を設置し、1557年に病院として設立した<sup>12</sup>。彼の名にちなんで大分市医師会立病院は「アルメイダ病院」と称され、現在も彼の名を残している。今日、アルメイダは日本の医学に大きな影響を与えた人、また社会福祉事業の創始者として広く知られる。

キリシタンたちはラテン語を唱え、その子どもたちもラテン語の聖歌を歌った。その曲は、「アヴェ・マリア Ave Maria (天使祝詞)」、「クレド Credo (信仰宣言)」、「サルヴェ・レジナ Salve Regina (あわれみの元后)」、「ミゼレレ・メイ・デウス Miserere mei Deus (神よ、われをあわれみたまえ)」、「ラウダーテ・ドミニム Laudate Dominum (すべての国よ、主を賛美せよ)」、「ディク・ノビス・マリア Dic nobis Maria (マリアよ、われらに語れ)」などであった<sup>1</sup>。

当初のキリシタンが歌った聖歌は、主に単旋律のグレゴリオ聖歌であったが、キリスト教の発展に伴い、イエズス会は多様な音楽を導入するようになり、日本の少年たちは単純な聖歌だけでなくラテン語の多声聖歌や楽器演奏を習得した<sup>13</sup>。16世紀末、イエズス会宣教師により設立されたキリスト教の神学校で、日本で初めて子どもの教育に音楽が取り入れられた<sup>129</sup>。

## 2. 神学校の設置と音楽教育

イエズス会の日本における布教活動事業のひとつの基盤に、子どもに優れた教育を受けさせ、将来彼らを宣教師に育てる高等教育があった。当時のローマ・カトリック教会の教皇グレゴリウス13世（Gregorius XIII、在位1572-1586）は、聖職者を育成するため、多くの神学校、神学大学などをヨーロッパに設置した。ローマ教皇に支持されていたイエズス会が1551年に設立したローマ学院は、現在でもグレゴリアン大学として存続している。イエズス会のアジア、アメリカへの布教は、教皇グレゴリウス13世にとって最大の事業であり、各地の神学校はキリスト教布教の活動拠点となっていた。既にインド管区のゴアにも神学校があり、東洋における最高水準の教育が行われていた<sup>12</sup>。そして1579年から1603年まで三度に渡って、教皇令により東インド管区の「巡察師」（Padre Visitador、各地の布教事業を促進し、報告する任務）として来日したイエズス会宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano, 1539-1606）の計画により、日本にも教会とそれに付属する神学校が九州を拠点に設立された<sup>14,15</sup>。

1580年に教育機関設置のため、日本の布教管轄区域は肥前、豊後、都の三教区に分けられた。肥前の有馬には有馬鎮貴の協力を得て、仏寺を改造したセミナリオ（Seminarario）が設立され、そこで上流家庭の子どもたち22名が教育を受けた<sup>3</sup>。同年、豊後の臼杵にノビシャド（Noviciado）が設立された。翌年1581年には都、安土に、キリシタンに特に好意的であった織田信長の協力によりセミナリオを上階に伴う三階建の修道院が建てられた。さらに豊後府内に宣教師の養成機関としてコレジョ（Collegio）が設立された。その他1590年、長崎にある坂口の館（たち）には語学コレジョが、そして1601年にはヴァリニャーノの後を引き継いだ宣教師ルイス・セルケイラ（Luis Cerqueira, 1552-1614）によってもコレジョが設立された<sup>14,16</sup>。

日本に設立された子どもたちが学ぶセミナリオは、将来の司祭を養成するための学校で、現在の初等教育機関や小神学校にあたり、10歳から18歳以下の生徒が在籍した。予科1年、本科3学級の全寮制で、入学前の予科では8歳頃から10歳の子どもたちが日本語の読み書き、道徳や歌を学んだ。キリシタンの子どもたちはラテン語の歌やカテキスモ（教理問答）を暗唱し、驚くばかりの理解を示した<sup>35</sup>。

ヴァリニャーノは1580年に「セミナリオ内規」を発

布した。この内規には子どもたちへの厳しくとも愛情のある教育指針が細かく記されており、早速、有馬のセミナリオで用いられた。この内規によれば、セミナリオへは両親の希望と本人の意思により、永久に教会に奉仕する者のみに入学が許可された。また子どもたちは清潔な部屋と十分な食事が与えられ、優れた教育と深い愛情と温情により育てられた。ここでは音楽が重要視され、毎日一時間、器楽か声楽の勉強が義務付けられ、余暇も合唱や器楽の練習にあてられた。才能がある子どもは助手として教え、子どもたちが習得した音楽は、教会で盛大に演奏された。音楽を教える教師は、音楽的天分を持つ宣教師で、彼らが主に合唱の指導、またオルガンや楽器の演奏法と製作も教えた<sup>11</sup>。

宣教師が日本に導入した南蛮楽器はクラヴオの他ヴィオラ、チャルメラ、ラヘイカ（チェロの一種）などがあった。イエズス会の報告集のなかで最も言及されている楽器はヴィオラであり、現存はしないが、日本でも製作されていた。聖歌の伴奏にはクラヴオやヴィオラが使用され、宣教師ヴァリニャーノが1579年来日の際、数台のオルガンを持参し、安土と豊後府内の臼杵（大分）と肥前の有馬（佐賀）に設置し、オルガンも主流となった。オルガンは1600年頃マカオで制作されていたが、日本の天草でも竹パイプのオルガンが造られた<sup>47</sup>。

子どもたちはセミナリオを卒業後、神父になることを希望し、その適性があると認められた者は、コレジョに入学した。コレジョは三年制の自由学科で、今日の大学の教養学部および高等教育機関にあたり、ここでは「自由七学科」（Liberal arts、中世ヨーロッパの大学基本教科）をふまえたルネサンスの学問が、パリ大学などの名門大学で学んだ優秀な宣教師たちによってラテン語で教授された。コレジョの学問的レベルはヨーロッパの大学に匹敵していた<sup>3,4,16</sup>。これらの教育機関が設立されることで、日本には優れたヨーロッパの教育とともに音楽が持ち込まれたのである<sup>13</sup>。

日本におけるイエズス会神学校は、安土桃山時代という政治状況が不安定な中、各地の権力者の協力と援助を受けて開設されていった。当時の権力者がキリシタンを保護した理由は、キリスト教の信仰と西洋文明の導入と同時に、主に武器を中心とした南蛮貿易による現世的利益追求が絡んでいた<sup>3</sup>。とくに織田信長のキリスト教に対する関心と宣教師への優遇は格別で、彼はキリシタンと親しく交流し、西洋音楽を好み、度々セミナリオを訪れてはヴィオラやクラヴオの演奏を聴



いた。織田信長がヴァリニャーノに安土城の描かれた屏風を贈呈したことは良く知られている。この屏風は、天正遣欧少年使節の訪欧の際ローマ教皇に献上され、ヴァチカンの宮殿に置かれたが、行方が分からなくなり現存しない<sup>17</sup>。

セミナリオをはじめ、各地に設置された教育機関は、当時の日本のキリスト教に対する流動的な政治の影響を直接受けたため、キリシタンへの風当たりが強くなると何度も場所を移動しなければならなかった。キリシタンの保護者であった織田信長の死（1582年）や、豊臣秀吉の伴天連追放令（1587年）により、安土のセミナリオは高槻や大阪に移動し、1587年には有馬（肥前）のセミナリオと合併した。そのほかのコレジョやノビシャドなどの教育施設も、主に九州各地を転々としながら、1600年ごろに長崎に集結した<sup>13</sup>。

### 3. 天正遣欧少年使節

#### 1) 少年使節の音楽訪欧

日本に教育施設を設立したヴァリニャーノは、九州のキリシタン大名、大友宗麟、有馬晴信、大村純忠の大名の名代として少年をローマに派遣することを発案した<sup>5,6,14</sup>。この少年たちの使節派遣は、宣教師ヴァリニャーノたちによる日本における子どもたちのキリスト教教育・音楽教育の成功の証であり、これをイエズス会に示す使節であった<sup>3</sup>。九州全セミナリオの学生のうち13、4歳の優秀な少年が4人選ばれ、宣教師ヴァリニャーノとメスキータが同行し、彼らは1582年、長崎からローマへ向けて出帆した。この4人とは、正使伊藤マンショ（大友宗麟の親戚）、正使千々石ミゲル（有馬晴信のいとこ）、副使原マルティノおよび中浦ジュリアノ（大村純忠の家臣の子）であった<sup>11,14</sup>。少年たち4人はすべて、有馬のセミナリオの第一回入学生で、彼らは天正遣欧少年使節（以下「少年使節」と略）と呼ばれた<sup>1,6,17</sup>。

「少年使節」は、1582年2月29日長崎を出帆して、途中マカオに10か月滞在し、マラッカを経て、インドのゴアでヴァリニャーノと別れ、続く旅をロドリゲス（João Rodrigues, 1561-1633）と共にローマを目指した<sup>2,3,11,15</sup>。そして、日本を出発して2年半後の1584年8月11日、ポルトガルの首都リスボンに到着した。そこから、スペインを経由して最終目的地ローマに到着した。

彼らは、セミナリオでかなりの教育を受けていたう

えに、この長旅の間、船中や寄港した場所で日本語の読み書きやラテン語、さらに音楽の練習に時間を費やしたので、ヨーロッパに到着した時には、かなり演奏能力は上達していた<sup>1,4,17</sup>。

苦難の航路を経て、少年使節がリスボンに到着すると、イエズス会の司祭たちは彼らを抱擁の挨拶で迎えた。エヴォーラ（ポルトガル）の街では、伊藤マンショと千々石ミゲルが、今なお現存するエヴォーラ大聖堂のパイプオルガンを演奏した。そして1584年、ポルトガル国王、兼スペインの国王フェリペ2世に謁見の際に、少年らは接吻と抱擁で迎えられた。さらにスペインではマドリードの王宮に迎えられ、スペイン王と王妃の謁見を受けた<sup>5,6,17</sup>。

「少年使節」は、イタリア各地の教会、修道院、学院を訪問しながら1585年3月22日にローマに到着した。彼らは、ここでローマ・カトリック教会の教皇グレゴリウス13世の謁見を受け、教皇に日本から携えてきた屏風を贈呈した。教皇は日本から来た使節を、涙を流して歓迎したという記録がある。この後、教皇は死去し、教皇の座を継承したシクストゥス5世（Sixtus V., 在位1585-1590）も「少年使節」を戴冠式に招待し、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂までの行列に主客として迎えたほど、彼らを厚遇した<sup>14</sup>。彼らは同年、6月1日までのおよそ二か月のローマ滞在中、偶然にも、教皇交代などヨーロッパの歴史に残る瞬間に遭遇した。

「少年使節」は、ローマを後にしてボローニャ、ヴィチエンツァ、マントヴァなどイタリア各地を見聞した。ヴェネツィアの修道院では荘厳に「デ・デウム・ラウダームス」の讃歌で迎えられ、ヴィチエンツァでは、オリンピア劇場で行われた歓迎式典に出席した<sup>14</sup>。この劇場には使節を描いた壁画が現存する。少年使節のことは、ヨーロッパ各地で大きな話題となり、多数の出版物が刊行された<sup>4,17</sup>。

#### 2) 少年らとカストラートの接点

16世紀後半、ヨーロッパはルネサンス時代、あたかも少年使節がヨーロッパを訪れた時はこの時代であった。ローマ・カトリックの教会音楽は、多声聖歌が全盛期を迎え、スペインの宮廷には作曲家ヴィクトリア（Tomas Luis Victoria, 1548-1611）が仕え、ローマでは教会をはじめ、宮廷礼拝堂に作曲家パレストリーナ（Giovanni Pierluigi da Palestrina, 1525?-1594）やガブリエリ（Giovanni Gabrieli, 1554-1612）、そしてラッソ（Orlando di Lasso, 1532-1594）など、当時を代表する

作曲家が活躍し、彼らの芸術的多声聖歌が歌われていた<sup>18</sup>。

ミサでは歌による礼拝が一層重視され、各地の大聖堂には、教会をはじめ、学校で徹底した歌の訓練を受けた歌手が常時10人から20人在籍していた。彼らの中で多声聖歌のアルト、ソプラノの声部は男性成人ファルセット歌手、および少年聖歌隊が歌っていた<sup>19</sup>。

このような音楽を体験した「少年使節」の見聞や体験を聴取した記録、編纂した貴重な資料がある。この資料はヴァリニャーノがスペイン語で書いたものを、1590年マカオでデ・サンデがラテン語で記した『天正遣欧少年使節記見聞対話録』であり、日本使節の見聞対話録の中で、少年使節のひとり、千々岩ミゲルが、大村喜前の弟リノ、有馬晴信の弟レオに聖歌隊の特徴ある美しい声について、また日本の歌との比較について語った下記の記録がある<sup>20,21</sup>。

「われわれはきっとヨーロッパの歌唱が一定にすばらしい技術をもってつくられていることに気がつくであろうと思う。…ある調子は高くあるものは低く、ほかはその中間であって、それらが同時に巧みな調節をもって発せられて、そこに一種えもいわれぬ和音・諧調を生ずる。これらになお、いわゆるかりの小声 *falsa vocula* (うら声) と、また並の調子を越えて、ごく高く発せられるもののが加わることを知っていただきたい。それらはすべて、あるいは音楽の規則を守りつつ、あるいは時にこの規則を越えて高く発せられることもあって、それがいっせいに楽器の音に合致して発せられると、聞く者の耳にとってこれほど楽しいものはない。…おのずからそこには一種の完璧な技芸が現われ…この技芸をヨーロッパの人士は子供のときから熱心に学んで大きい進歩を示している。…われわれ日本人の間に行われる音楽では、その歌に何も調子の分化がなく、発声の仕方はいつも同じ一本調子で変わらないから、今までのところ音楽の技芸もなければ訓練もまったく存在せず、こういう技芸や訓練のないところでは和声の規律もまた学びえないことになる」<sup>4,9,20</sup>。

千々岩ミゲルが述べたこの率直な感想にある「いわゆるかりの小声 *falsa vocula* (うら声) と、また並の調子を越えて、ごく高く発せられる」この声は、多声聖歌のテノールよりも上の声部を男性が歌うアルトおよびソプラノの高い声である。

16世紀末、ローマ・カトリック教会に高音部を歌う歌手として、少年のような高い声をもったカストラート(男性去勢歌手)が登場した。カストラートは1599年にローマ教皇礼拝堂聖歌隊として公式に採用され

た。ところが、それ以前の1562年にスペインからローマ法王庁に贈られた歌手フランシスコ・ソート神父(Francisco Soto)をはじめ、スペインから来た歌手が、ファルセット歌手という名目でローマ教皇の聖歌隊に入っており、彼らはカストラートだったという説がある<sup>22,23</sup>。そのため1585年に少年使節がローマを訪れた際、カストラートが教皇グレゴリウス13世の葬儀や、新教皇シクストゥス5世の戴冠式のミサで歌っていたとしたならば、「少年使節」は、カストラートの声を聴いた可能性があると考えられている<sup>24</sup>。また、「少年使節」がローマに滞在していた1585年に、シクストゥス5世は新教皇に即位し、その年に「女性歌手および女優追放」令を発している。この教皇令は、当時ローマにおけるカストラートの存在を示すものであり、「少年使節」とカストラートとの接点があったことを示唆するものである。千々岩ミゲルをはじめ、少年使節がカストラートの存在を知っていたか明らかでないが、この記録に残された彼の言葉「いわゆるかりの小声 *falsa vocula* (うら声) と、また並の調子を越えて、ごく高く発せられるもののが加わること」は、彼がローマの教会の聖歌隊でカストラートの声を聴き、感じた率直な感想であったと推察する。

### 3) 帰国後の少年使節

1590年7月21日、少年使節は8年余りを経て日本の長崎港に帰国した<sup>1,7</sup>。「少年使節」たちは翌年、豊臣秀吉に謁見し、西洋楽器を見事に演奏した。この時、豊臣秀吉は大変喜んで、楽器を手に取り、少年たちに三度も演奏のアンコールをしたという<sup>4,25</sup>。その後、「少年使節」の4人はイエズス会修道士となり、セミナリオでヨーロッパから持ち帰った音楽を教えた。セミナリオの生徒たちは、彼らの指導により西洋音楽を身に付け、容易に演奏することが出来るようになった<sup>25</sup>。また、1591年、子どもたちは降誕祭劇を日本語による幕間の余興を添えて演じ、「大いなる気品と威厳」をもった演技によって多くの司祭たちが涙を流すほど感動したという記録がある<sup>24</sup>。その後、1608年に千々石ミゲルを除く三人は長崎で神父となった<sup>3</sup>。

「少年使節」がヨーロッパから持ち帰った品々の中には楽器の他、ゲーテンベルグ印刷機などの多くの珍重品があり、1591年から日本最初の活版印刷による教理書や辞書そして楽譜などの制作に使用された。この印刷機で刊行された楽譜のなかで唯一現存するのは、1605年に日本の司教であったルイス・セルケイラが日本文化・習俗を勘考し、日本教会のために編んだ

ラテン語の典礼定式書「サカラメンタ提要」(Manuale ad Sacramenta)である。これは朱色と黒の二色刷りで印刷されており、死者のため、とくに埋葬のためのラテン聖歌が13曲、高位聖職者の教会訪問のためのラテン聖歌が16曲載っている。これは当時の聖職者やコレジョやセミナリオで学ぶ子どもたちによって歌われた歌の貴重な資料となっている<sup>1,27</sup>。

17世紀初めには、全国のキリスト教の信徒は約20万人にのぼり、日本に設置された神学校は200校にも及んだが、日本におけるキリスト教は、その後発展することなく、弾圧されることになった。1587年、豊臣秀吉によって初めての伴天連追放令が発せられたが、激しい弾圧が始められたのは、1596年のフランシスコ会への禁教令の後、1612年に江戸幕府が発した禁教令からであり、さらに決定的な弾圧は1616年に幕府によって発せられた鎖国令であった<sup>2</sup>。キリスト教大弾圧によって楽器、楽譜は焼却され、神学校、教会などの建物すべてが著しく破壊された。遂にはポルトガル人の来航は完全に禁止された。激しい迫害が始まり、多くのキリシタンが殉死した。そしてキリスト教音楽、つまり西洋音楽も跡形もなく消えた。かろうじて生き残ったキリシタンは、祈りの言葉を唱え続け、その祈りは、現在も長崎の生月島、西彼杵半島、平戸島、五島などに居住する「かくれキリシタン」たちによって「オラショ」として伝承されている<sup>26</sup>。

西洋音楽は16世紀末に初めて日本に伝えられたが、その音楽と教育は禁教令によって断絶され、再び日本に洋楽として輸入されたのは、イエズス会の初来航から300年以上の時を経た明治期であった。

## 結 語

16世紀末にもたらされた西洋文明を、日本人は受け入れ、キリスト教の宣教師たちと積極的に交流した。キリスト教の教育施設では非常に高度な教育が行われ、キリシタンの子どもたちは、西洋音楽を短期間で見事に習得し、各地の領主や権力者も彼らが演奏する西洋音楽の響きに魅了された。16世紀末に日本でこのような高等教育が組織的に行われ、成果をあげ、天正遣欧少年使節の訪欧という形で具現化され、高く評価された。これらの実績が、後のキリシタン追放令によって根絶されたことは、日本の歴史にとってきわめて残念なことであった。

本稿では、16世紀末の日本におけるキリスト教の神

学校の設置とその神学校においてキリシタンの子どもたちが受けた音楽教育、および、そこで教育を受け、選ばれた4人の天正遣欧少年使節とその訪欧について記し、彼らとカストラートの接点に言及した。

## 謝 辞

本総説を執筆するにあたり、英文要旨作成のご指導をいただきました小野和人先生(元西南女学院大学人文学部教授)に深く感謝いたします。また、文献検索の御指導、御協力をいただいた西南女学院大学図書館の皆様へ感謝の意を表します。

## 引用文献

1. 皆川達夫：洋楽渡来考・キリシタン音楽の栄光と挫折。pp.13-49, pp.578-630, 日本キリスト教団. 東京, 2004
2. 片岡弥吉：日本キリシタン殉教史. pp.3-162, 時事通信社. 東京, 1979
3. 海老沢有道：日本キリシタン史. 第4版. pp.14-90, 塙選房. 東京, 1966
4. David van Ooijen; European Music in Japan in the 16th and 17th centuries. <http://www.fomrhi.org/vanilla/fomrhi/uploads/bulletins/Fomrhi-120/Comm%201955%20web%20version.pdf#search='david+van+ooijen+european+music'>, (accessed 2014-8-5).
5. Michael Cooper: Spiritual Saga, The Japanese Mission to Europe, 1582-1590, 1982. An article from Francis Britto's All About Francis Xavier. 2006, Sophia University Pravate Home Page Service. <http://pweb.sophia.ac.jp/~britto>, (accessed 2014-8-4).
6. Derek Massarella: The Japanese Embassy to Europe (1582-1590). pp.1-12, The Journal of the Hakluyt Society. 2013. [www.hakluyt.com/PDF/Massarella.pdf](http://www.hakluyt.com/PDF/Massarella.pdf), (accessed 2014-8-4).
7. 吉川英史：日本音楽の歴史. pp.362-369, 創元社. 東京, 1965
8. 村上直次郎譯註：耶蘇會士日本通信豊後編上巻. pp.72-73, 帝国教育會出版部. 東京, 1936
9. 竹井成美：南蛮音楽その光と影. pp.38-81, pp.120-137, 音楽之友社. 東京, 1995
10. 村上直次郎譯註：耶蘇會士日本通信豊後編上巻. pp.185-228, 帝国教育會出版部. 東京, 1936

11. 村上直次郎譯註：耶蘇會士日本通信豊後編上巻. pp.416, 帝国教育會出版部. 東京,1936
12. 松田毅一監訳: 十六・十七世紀イエズス会日本報告書. 第三期. 第1巻. pp.192, 同朋舎. 京都, 1997
13. 皆川達夫：キリシタンの典礼と音楽.西洋音楽ならびに東西文化交流の研究. 29(2),pp.129-134,上智大学紀要. 1980
14. アレッサンドロ・ヴァリニャーノ: 松田毅一他訳：日本巡察記. pp.67-365. 東洋文庫229. 平凡社. 東京, 1965
15. ヴァルター・ザルメン：Musikgeschichte in Bildern, 9. 人間と音楽の歴史. 第9巻・16世紀の音楽生活. 音楽之友社. 東京, 1985
16. Hubert Cieslik: 日本における最初の神学校. キリシタン研究. 第十輯. キリシタン文化研究会編. 吉川弘文館. 東京, 1965
17. 松田毅一：新装版天正遣欧使節. 新版第1刷. pp.14-67, pp.159-257, 朝文社. 東京, 2008
18. Grout DJ, Palisca CV: A History of Opera. 5th ed. 1996, 戸口幸策, 津上英輔, 寺西基之共訳 :新西洋音楽史 (上) . pp.17-104,音楽之友社. 東京, 1998
19. Bianchi L: Palestrina nella vita, nelle opera, nel suo tempo. 1995, 松本康子訳, 金澤正剛監修：パレストリーナの生涯. pp.302-342. 河合楽器製作所. 東京, 1999
20. 泉井久之助, 長沢信寿, 三谷昇二, 角南一郎訳: デ・サンデ天正遣欧使節記. 新異国叢書5. pp.172-190, 雄松堂書店. 東京, 1969
21. J.F.Moran: The Japanese and the Jesuits, Alessandro Valignano in sixteenth-century Japan. pp.1-41. Poutledge. USA, 1993
22. 金谷めぐみ,植田浩司：カストラートの光と陰. 西南女学院大学紀要Vol.18. 85-91, 西南女学院大学. 2013
23. Heriot A: The Castrati in Opera, pp.10-84, Da capo press. New York, 1974
24. 関根敏子：カウンターテナーの声 21世紀の音楽. 3:16-29. 2003
25. 松田毅一：十六・十七世紀イエズス会日本報告書. 第一期, 第一巻. pp.229-307, 同朋舎. 京都, 1987
26. 皆川達夫：洋楽渡来考CD&DVD版解説. 日本キリスト教団. 東京, 2006.
27. 高祖敏明：サカラメンタ提要解説. 中国国家図書館. 北京. 雄松堂書店. 東京, 2010



## The Musical Education of the Children of *Kirishitan*

Megumi Kanaya\*, Kohji Ueda\*\*

### <Abstract>

At the end of the 16th century, Westerners came over to Japan and introduced Western civilization. In 1549, a Jesuit missionary named Xavier began to propagate Christianity in Japan, and the music indispensable to church services of Christianity was taught to Japanese children. In various parts of the Kyushu area and Azuchi, seminaries (*seminarios*) were established, and there the children of *Kirishitan*, or the Japanese Christians at that early stage, were given an education equivalent to one in European seminaries, singing in Latin and playing the Western musical instruments. The quality and effect of the education was proved by the Boy Envoys, who were dispatched to Europe in the Tensho period (to be abridged as 'Boy Envoys'). The four chosen boys departed from Nagasaki as Boy Envoys in 1582, arrived in Portugal in 1584, visited successively places in Spain and Italy, and were given blessings and welcomes on the way. They visited Rome just at the time when the Spanish singers (called '*castrati*'), who sang in the treble key, began to appear in the choirs of Catholic churches. There remains a precious document that records the conversation, in which one of the Boy Envoys observed the comparison of Western music with that of traditional Japan. The authors also intend to examine the point of contact between the Boy Envoys and *castrati* in this document and the historical background to this meeting.

Keywords: children, *Kirishitan*, education, Western music, the Tensho Boy Envoys to Europe

---

\* Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

\*\* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University